

諸有衆生 聞其名號 信心歡喜 乃至一念 至心回向  
願生彼國 即得往生 住不退轉 唯除五逆 誹謗正法

あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得て不退轉に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く。

(『仏説無量壽經』聖典四四頁)

第2組 遠成寺住職

菊地 眞一

text by Shinichi Kikuchi

## 仏法聞き難し

### なぜ聞くのか（求道）

「仏は人間の苦を救うのではない。苦悩の人間を救うのである」。これは安田理深先生の言葉であるが、その意味するところは何であろうか。

まず「人間の苦」の方は、健康（病気）、経済（お金）、家族、人間関係などの問題であろうか。これらは、苦しんでいる現況から、元の平常の状態に戻りたいという苦しみである。この苦しみは各人各様が抱える問題であり、この解決のために宗教があると思っている人は多いのではないか。

しかし、安田先生は「仏は人間の苦を救うのではない」と言われ、続けて「苦悩の人間を救うのである」と言われる。「苦悩の人間」とは何か。それは私自身の内から起こる「問い」と言うものではないか。「自分とは何か」、「何のために生まれて来たのか」、「人間はなぜ傷つけ合うのか」、「死ぬとはどういうことなのか」、「自分は生きる価値など、ないのではないか」。これは人間の根本問題、根っこの問いであり、すべての人が抱えている問題と言えないだろうか。

苦悩の人間に応えている、それが「仏の救い」である。苦悩を通して仏法がはたらくのである。逆に言うと苦悩がなければ、仏法ははたらかないと言える。と共に、人間は苦悩を見たがらない。逃げる。安田先生の『浄土の教学』という法話CD（東本願寺出版）の中に、二河白道の話で行者が生死の問題を抱え、それから逃れようとして水・火二河に行き止まる。その時行者は河を南北に走

り去らんとする。安田先生はそれを、旅行、スポーツ、娯楽、遊戯に逃げることでありとお話される。つまり自分を誤魔化す。まことに「仏法聞き難し」である。これは人ごとではない、私のことである。

## 何を聞くのか（聞法）

しかるに『経』に「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞いて疑心あることなし。これを「聞」と曰うなり。

（『真宗聖典』 二四〇頁）

『経』は大無量寿経（大経）である。これは双巻経とも言われ、上下二巻あり、上巻は如来浄土の巻、下巻は衆生往生の巻と言われるが、「仏願の生起本末を聞く」とはまさにこれらのことを指す。その中、仲野良俊先生は衆生往生を説く下巻の重要性を次の様に教示して下さい。

「浄土諸派では、本願は仏様の手元にあるんだから浄土へ往ってみんとわからん。浄土真宗は本願成就です。成就というのは衆生の上に成就する。われわれのところに実現した。具体的に申しますと釈尊です。だから本願成就の経文というのは、釈尊の本願体験のご文です。体験がなかったら単なるお話です。」

（『浄土真宗』 一〇六～七頁）

浄土諸派の浄土往生は死んでから。それに対し真宗は今、この娑婆において浄土とつながる。現生不退である。親鸞聖人は本願成就文を通してそのように頂かれた。

なぜこのような違いが出るかと言うと、念仏、信心、回向に対する違いである。浄土諸派は念仏を如来に回向して助かるとする。真宗は「欲生我国」の如来の呼びかけが念仏となり、「願生彼国」と信心が成就した。仲野先生は

「念仏は如来のはたらきであり、信心は人間の上に実現した如来の心である」

（『日常から精神へ』 二五〇頁）

と教示して下さい。そして本願成就の釈尊によって、韋提希が浄土を別選し、阿闍世が無根の信（すべての者が救われるなら、地獄に落ちても苦としない心）を起こさしめた。